
魔法少女リリカルなのは +secret ambition+

九樹林ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは + s e c r e t a m b i t i o n +

【Nコード】

N 0 5 8 2 I

【作者名】

九樹林ツバサ

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

第1話 「非日常」(前編)(前書き)

作者の事情により、作品の編集を行う場合があります。
御了承下さい。

第1話 「非日常」(前編)

(たす・・・け、て)

少女の声が、微かに聞こえる。

(ま、すたー・・・)

しかし、誰にも届かない。

(お願い・・・)

びびっ、びびっ、びびっ

・・・うつ、うつせえ。

ガンッ、ガシャーーン

びびっ、びびっ、びびっ

Z Z Z

「ゆうー、遅刻するわよー」。

・・・Z Z Z

ん？今何時だっけ・・・？

時計は・・・あれ、いつもの頭元にねえぞ。どこにいったん、お？
なんで床に転がってんだよ。ったく、誰だよ床に勝手に置きやつて・・・

・・・あ！？8時過ぎてる！？完璧遅刻

じゃんよ、これ！？

急いで支度しねえと、制服、制服！きよ、教科書は……入ってんな、よし。

俺は学校へ行く準備を済ませ、直ぐに1階へ降りていく。

「母さん！どーして起こしてくれなかったんだよッ！？」

「起こしたわよ。あんたが起きなかっただけでしょ？」

「それは起こしたって言わねえんだよ！ああつ、もう朝食抜きでいい！」

そう言つて俺は自宅を飛び出していく。いつもの日常へ。

そう、あのときまでは。

俺の名前は高瀬^{たかせゆ}由宇。私立聖祥大附属高校1年生の16歳だ。血液型はA型。趣味は卓球。好きなアーティストは水樹奈々。プロフィールはこんなモンだ。

私立聖祥大附属高校には高校受験で入学した。ほんつつつと受験が辛かった。私立なんてそうそう入れるもんじゃない。よくやったぜ、自分。

今は4月末。大体自分のクラスの面子の顔も把握してきて、他のクラスの情報も入ってくる時期だ。特待生のヤツが隣のクラスにいるとか、柔道の大会で県ベスト4のヤツが隣の隣のクラスにいたりとか、イケメンや美人についても色んな噂が飛び交ってる。

俺？ふふつ、俺は生まれてから16年、ずーっと独り身だ。男女関

係の噂に興味がない訳が無い！俺の究極の情報網で、あんなコトからこんなコトまで噂を仕入れてんだぜ？聞き落とすなんて言葉は俺の辞書には存在しねえ！

最近仕入れたモンはな、俺んクラスの八神はやてってヤツと友達らしい、ふえ・・・そうだ、フェイト・テスタ・・・ナント力が、Dクラスのメガネ君に告られたらしく、即断ったそうな。まあ、1年の美人ランキングの上位にいるヤツ程、ハードルたけえもんな。そりゃしゃーない。

俺はそんな高望みはしていない。つーか、仮に告ったところで結果は目に見えて分かる。そんなバカな真似はせずに、他の可愛い女子を・・・って、やっべ、ホーム開始のチャイムが鳴ってやがる。ああー、これで遅刻確定じゃん。もういいや、歩こ。

学校までは後100メートルもないのだが、遅刻が確定してんならホーム終わって担任が教室出ていってからが入りやすい。

下駄箱に着いたと同時にチャイムが鳴り、ホームの終了を告げる。よっしゃ、教室行か。

1階の1-Bが俺の教室だ。教室は1年次全部で7クラスある。それから考えるとマンモス校だよな、ここって。

ガラガラツと勢い良くドアを開ける。クラスの中が騒がしかったので、ホーム終了は確認済みだ。

「何だ、高瀬。今頃登校か？」

げっ・・・まだ教室には担任が残ってやがった。くっ、誤算だ。

「すいません、ハアハア。」

今になって息切れしたフリを試してみる。

「で、何で遅刻したんだ？」

「それは……道端の途中で血だらけで倒れていたおばあさん
を負ぶって病院まで連れて行ったんスよ、ハッハッハッ。この聖祥
大附属高校魂が、どうしても見捨てて置けないって言うもんだから。」

「登校中にか？」

「勿論スよ、先生。イヤー、朝からフラつく訳ないでしょ。先生も
冗談キツイな。」

「そしたら制服が血だらけで大変だったろう？」

「……あ。」

「嘘つくときはマトモな嘘つこうな。」

「キヤハハハハ、と教室から笑いが出る。クソっ、この野郎……」

「で、ホントの理由は？」

「……寝坊、です。」

「次から気をつける。」

「はい……」

「ちえ、何だよ。今日は偶然だったの。」

「担任は名簿帳に俺の遅刻を記録すると教室を出て行った。」

「よお、ゆう。ばあさん助けたんやって?」

ニヤニヤしながら近づいてくるコイツ。中学からの付き合いで、中^な山雅樹^{かやまさき}。みんなからは「なかやん」って呼ばれてる。腐れ縁なのか、中学の間はずっと同じクラスで現在も同一クラスだ。他のクラスにせつせと足を運んでは情報をかき集める。俺の究極の情報網が成立するには、こいつの存在が不可欠だ。とはいっても、フツの友達なんだからな。

「それはそうと、今日の朝刊や。」

「朝刊」とは、俺らの隠語でその日の朝迄に仕入れた情報のことだ。無いときもあるんだが。

「なんなんだ?」

「なんと、俺らのクラスの八神さんが学校を休んでるんや。」

「はあ? そんなん別に重要でもな……」

「それがや。その友人の高町さんとフェイトさんも休みなんやで?」

「へえ……」

高町なのはも八神の友達つてのは知ってる。確か月村すずか、アリス・バニングスつて奴らもそのはずだ。
5人全員が美人で仲良しだから、学内でも注目の的だ。俺には縁もゆかりも無い話だ。

「何かの偶然・・・にしては奇妙だな。」

「なあ！そう思うだろ、お前も。」

いや、俺自身はそんなハードル高い奴らに興味ねえんだ。ただ、出来るだけ詳しく知つとくことで他の情報と交換出来たりするから聞かない訳にもいかねえんだよな、これが。

「でも、その3人は午後になったらいつも帰ってんだろ？」

「そう。それも不思議なんやけど、家の事情で早退してるとか。」

「んなん、個々人の家の事情があんだろ。」

「まあ、それもそやな。・・・おっと1限が始まるやん。そいじゃ。」

「

「おう。」

こうして、1日が始まった。

んで、放課後。

俺は帰りに晩飯の買い物を頼まれて、スーパーに寄るつもりだ。早く帰んねえと、うるせえからな。

バックに荷物を詰めていると、なかやんが教室に入ってきた。

「うーす、ゆーうー。」

「ん？なかやん、どーしたんだ？」

「お前、進路選択どないするん？」

「ああ、あれ。特に何も考えてねえな。取り敢えず、フツーな大学にでも通うつもりだ。お前は？」

「わい？わいは勿論グラフィッカーや！」

あー・・・はいはい、そうでした。こいつ、中学んときに見たCGにすげえ感動して、それからグラフィッカー目指してんだっけ。いいよな、夢があるヤツは。

「ゆーも早う決めとき。後々のためやでえ？」

「ヘイヘイ」

「んなら、わいは今からバイトいかなあかんから、ほいならな。」

「また明日な。」

さて、急がねえとタイムセールが始まっちまう。良い肉が先に売れちまうからな。

そうして俺はスーパーで買い物をし、家路についた。

「この肉なら、なかなかのモンだろ。」

丁度タイムセールが始まったときにスーパーに着いたんで、運が良

かった。

そう思つて帰つてゐる途中だった。

ドンッ

誰かにぶつかった。

「うわっ、すいませ……」

ん、を言おうとしたまま俺は驚いた。

「や、八神!？」

「ゴメンなさい、よそ見してたんでって、えーっと、聖祥高校の人？」

「同じクラスなんだが……」

「あ、ああ、うん。どーりで見たとある顔やなあ思つてたところよ。」

絶対憶えてねえな、こいつ。まあ、百歩譲つてそれはいい。

「……高瀬。高瀬由宇だ。そんなことより、どうして学校休んでこんなところについてんだ？」

「ちょ……ちょっと私用なんよ。じゃ、私急いでるから、またね。」

「ちょ、おい！」

そのまま八神は走って行った。何だってんだ、あいつは。おっと、時間が押してるな。帰るか。そう思って再度自宅方向に足を向けたときだった。

(・・・い。・・・けて。)

ん？何か聞こえたか？

(・・・たしの・・・ター)

・・・なんだ？この声？
どこからともなく、聞こえてくる。でも、姿は見えない。

(・・・助けて、私の、マスター)

か細く、しかし必死な声だ。

どこだ・・・？どこにいるッ！？

辺りを探してみるけど、なにも無い。誰もいない。

(マスター・・・助けて)

！？学校の方からだ！

何故分かったのか、この俺にも分からない。でも、確かに学校の方からだと確信が持てる。

学校へ向けて走り出す。

「待つてろ、俺が助けてやる。」

暫く走って学校に着いた。が、校内は不気味にな位に静けさが漂っていた。普通なら、部活帰りの部員たちがポツポツといるはず。

「何だよ、これ・・・」

一般ピーポーの俺でも分かる。いつもとは違う「なにか」が学校で起こっている。

そして、声が今迄で一番大きく聞こえた。

（お願い、助けて。私のマスター！）

茂みから・・・聞こえる！

俺は校舎近くの茂みに近づき、声の主を探し回った。

茂みの奥で、なにかが蒼く光っている。

手を伸ばして、それをつかみ取る。

「・・・宝石？」

見た目は、ダイヤモンドカットが施されているが、勿論ダイヤなどではない。光っているのだから。

少しの間、見惚れていると突然光が溢れ出してきた。

「一体、なんなんだよ・・・！？」

その光はそのまま天まで光の筋となって昇っていった。夜天にそびえる1本の蒼光の柱。

それをどれほど見ていたのだろうか、気づいたときには柱が消えていた。

その代わり、

「ま、すたー？」

「うわっ！？」

目の前には蒼い目と髪をした女の子が正座を崩したような体勢で座っていた。髪は長く、座った状態で地面につく程だ。服はジャケツトにショートデニムっぽいものを着ている。それも蒼色だ。どこから出て来たんだよ。しかも蒼一色に全部統一されてやがる。容姿は綺麗なんだが、どういう趣味してんだ？
取り敢えず、声を掛ける。

「だ、大丈夫か？」

「貴方が、私の、マスター・・・」

「そ、そんな近づかないでくれ！」

ズルズルと俺の顔に近づくそいつから距離を取る。
心臓がバクバクいつてやがる。こんな夜に女子と2人きりなんてな
ったことがない俺には刺激が少々強かったようだ。

「名前は？」

「・・・エルフィ。」

「いい名前だな。」

なんとなく言ってみた。姓名判断士じゃあるまいし、何がいい名前か検討もつかない。でも、そんな俺でさえ一つ分かる事がある。絶対日本人じゃねえ。

ま、俺も自己紹介しとかねえとな。

「俺は高瀬由宇。この高校、聖祥大附属高校の1年生だ。」

「・・・たかせ、ゆう。それが、私のマスターの名前。」

「そのマスターマスターって、どうして俺がお前の、エルフィのマスターなんだよ？」

「それは、あなたがマスターたる資質を備えていたからです、マスター。」

「その資質・・・っておいおい、寒いのか？」

鼻をグスグスいわせてる。春先とはいえ、夜は少し冷えるからな。

「取り敢えず、俺んちに来い。話の続きはそれからだ。」

「・・・良いんですか、マスターの家にお邪魔して？」

「風邪引かれちゃ、こっちも困るんな。」

という訳で、俺んちまで連れて行こうとした時だった。

「見つけたぞ、ロストロギア・・・！」

「!？」

俺とエルフィは図太い声がする校舎屋上に目を向ける。人の影が月明かりに映る。男か？

「蒼刻の魔術、エルフィ！」

ビクッ、と自分の名前を呼ばれたエルフィは震えた。顔に青ざめている。

「お前、あいつに狙われてんのか？」

一度だけ、エルフィの頭が縦に動いた。
続けて、男が言う。

「そんな青二才をマスターに選んだのか、エルフィ！もっとお前のマスターに相応しい人物がいるではないか。この私がな！」

ッ！あいつ、黙ってりゃあしゃしゃりやがって！

「はあ！？何言ってるんだ、エルフィは俺をマスターに選んだんだ！マスターを選ぶのはこいつでお前なんかじゃねえっ！」

「その使い方を知らんのか、青二才？」

「使い方？」

「ふっ、その様子からして知らんようだな。なら、大人しく渡せ、このダルゴスにな！」

気付かない内にダルゴスとやらが、校門前にいた。いつの間に・・・ザクツ、ザクツ、と1歩、また1歩とこちらに向かつてくる。

「・・・マスター、逃げて下さい。このままじゃ、マスターも私もやられてしまいます。」

「はあ！？ざけんじゃねえ！！お前は助けて欲しいんじゃないのか！？そう言つてただろ！！」

「でも、これじゃ・・・」

「あああつ、もう！！んなこと抜かしてねえで答えろ！！お前はどうして俺を呼んだんだ！！言ってみろ！！」

「た・・・助けて、マスター。」

「うっし。それで良いんだ！！」

俺はエルフィを抱えて校門とは反対の校舎へ走った。そして校舎の窓ガラスをブチ破り、中へと入る。向かうは1階階段踊り場の倉庫。あそこなら出入り口は1カ所で全面コンクリ。内側から鍵が掛けられる。

走ってる間にも後ろから窓ガラスの割れる音が幾重にも重なって聞こえてくる。

「逃げてても無駄だ！」

あいつの声が学校中に木霊する。倉庫へ飛び込み、急いで鍵を掛ける。更に倉庫にあるガラクタをドアの前に有りつたけ置きまくる。

「こ、コレで少しは持つだろ・・・」

そのまま、俺はその場で崩れる。やっぱ女子とはいえ、抱えて走るのはキツイ。

「マスター・・・ごめんなさい、私のせいでこんな事に巻き込んだじやって。」

「ああ、そんなコトか。気にすんな。人はヒトとヒトとが支え合う姿を書いてんだぜ。」

こんな状況で金八先生の真似事してる場合じゃないのは分かっているが、仕方がないじゃん。それしか思いつかなかったんだから。エルフィはニッコリ俺に笑いかけてくれた。

「マスターは優しいんですね。」

「そつ、そうか?」

へへへ、と笑う。照れるな。

「私の事、話さないと、いけませんね・・・」

「・・・ああ、そうだな。」

逃げる事に必死で肝心なエルフィの身の上を聞いてなかった。

「マスターは、この敷地に入った時、何か見つけませんでした?」

「これか？」

そう言って俺はズボンに突っ込んでいたダイヤもどきを取り出した。

「そう、それです。それこそが蒼刻の魔術、エルフィ。そして、それは私でもあるんです。」

「・・・済まんが、赤点ギリギリの人間には理解しづれえ。もう少し分かりやすく頼む。」

「えと、それはデバイスと言って魔法を使うのに必要となります。戦闘時には魔法杖、所謂武器になります。その一部である管制人格は私です。私単体でも魔法は使えますが、威力はマスターより劣ります。ですが、私がマスターとユニゾンすることでマスターが絶大な魔力を得ることが出来るんです。」

ん、これでも結構分かりづらいんだが・・・
ただ、分かる事実が一つ。

「そこで俺が呼ばれた、と？」

「・・・ごめんなさい。」

「言っただろ？気にすんな。」

「・・・はい。」

「でも、これがありゃ、あの男と戦えるじゃん。」

「でも、慣れないうちは起動の詠唱を言わないと使えないんです。」

「メンドいな、それ。」

「・・・ごめんなさい。」

でも、このデバイスってモンであいつを、ダルゴスを倒せんなら結果オーライだよな。仕方ねえ。

「その詠唱ってのは何だ？」

「我使命を受けし者なり契約のもとその力を解き放て風は空に星は天にそして不屈の」

「ちょ、ちよつと待て！テレビの戦隊モノみたく、『ラ。ダー変身、トウッ』とかじゃないのか！？」

「起動詠唱はそんなに短くありませんよ？」

「・・・人生そんなに甘くない、か。」

なんて俺が世の中の厳しさを染み染み噛みしめっていると、わざわざ身をもって教えてくれるやつがいた。

ズガアアーーン

「うわぁっ!？」

「きゃっ!？」

ドアに積み上げたガラクタが突然吹っ飛び、その一部が俺らの方向に飛んで来た。

怪我は無いものの何が起きたのか一時分からず、俺は真っ先にエルフィを呼んだ。

「エルフィ!大丈夫か!？」

吹っ飛んで山積みになったガラクタからエルフィは出て来た。

「こっちは大丈夫です。マスターは？」

「ああ。なんとか。」

「ふん、無力だな。」

「・・・っ!てめえ!!」

ドアがあつた位置にはダルゴスが立っていた。

暗くてあいつの顔がよく見えない。でも、標的を見つけてほくそ笑んでるのは確かだ。

「エルフィ!!詠唱だ!言ってくれ!」

「我使命を受けしも」

「させるかぁーっ!」

ちっ、俺の方に突っ込んで来やがった！
とっさに出来たのは、目を瞑る事だけ。

・・・死んだのか、俺。

目を開けた。

目の前には、俺に背を向けて庇っているエルフィがいた。ダルゴスが右手を突き出し、それをバリアーで防いでいる。

「・・・エルフィ。」

「こんな何も出来ない奴を守るのか、エルフィ!!」

ダルゴスが吼える。

そうだ。俺が助けるって言ったのに。だかどうだ、助けられてんじやんか。何も出来ない、ただの足手まとい・・・

「・・・いいえ。マスターは何も出来ない人なんかじゃありません。だって、」

エルフィが言葉を切る。

「だって、私が選んだマスターですもん。」

ハッとした。こいつは、エルフィは俺を選んだ。俺を信じてくれる。こんな不利な状況でも。俺を、ただ俺を信じてくれる。

「こんなガキがか！？ハハッ、泣かせてくれるじゃないか、エルフィ！こんな雑魚でもマスターだもんな！？」

（マスター、聞こえます？）

「・・・エル、フィ？」

心に直接話しかけられた感覚だ。

（聞こえてるみたいですね。詳しい説明をしている暇がありません。詠唱、繰り返しして下さいね。）

エルフィには見えないが、少しだけうなづく。

（我使命を受けし者なり。）

「我使命を受けし者なり。」

「詠唱か？馬鹿馬鹿しい！」

攻撃の威力が高まる。

バリアーが軋み、エルフィが呻く。

（契約のもとその力を解き放て。）

「契約のもとその力を解き放て。」

（風は空に。星は天に。）

「風は空に。星は天に。」

（そして不屈の魂はこの胸に。）

「そして不屈の魂はこの胸に。」

「2人まとめて潰れてしまえ。」

バリアーに蜘蛛の巣状のヒビが入る。

「くっ・・・負けない。私達は、絶対、負けない!!」

「虚勢を張るのも終わりだな、エルフィ!!」

「マスター!!」

エルフィの声で、次の言葉が、最後の言葉が、自然と胸に浮かんた。

「この手に魔法を！エルフィ、セーットアップ!!」

第1話 「非日常」(前編)(後書き)

初めまして、九樹林ツバサといます。

まだ書き始めたばかりなので、文章につたない部分や表現の悪い部分があると思います。

今後の参考にさせて頂きますので、厳しい御感想、御意見でも構いませんので宜しくお願いします。

第1話 「非日常」(後編)

握っていた宝石から一気に蒼光が溢れ出し、俺を包み込んだ。

俺には訳が分からないまま、蒼光は光の粒となって消えた。

・・・手に何かを握ってる？

見てみると、大剣だった。目分量で刃の幅は40センチ、長さは15メートル程だろうか。スカイブルーの光沢を見せ、刃の付け根には八岐大蛇と刻まれている。グリップはそれと対象的に藍色だ。滑り止めなのか、柄と同色の布地が貼り付けられている。そのくせ嫌に軽い。地球に現存素材だけで作るのは、恐らく不可能だろう。服装も変わっている。上下とも蒼をベースにしているが、上着はロングコート風で、肘から先は切れている。その肘部位は赤と緑の線で淵取りされており、丁度肘が当たる部分には、サポーターなのだろうか、ひし形を半分に切った形の蒼いクリスタルが縫い付けられている。

下はスラックスの感じに近いかもしれない。特に目立った装飾もない。

まず、あいつをブツ倒さねえと。

俺は握った八岐大蛇を思い切りダルゴスに振り落とす。同時にエルフィのバリアーも割れる。

ズカアンと音を立てコンクリに大穴を開けるも、そこにダルゴスはいない。数メートル後ろに下がって回避していた。

「大剣？八岐大蛇か。ふん、珍しいな・・・」

「何だつて？」

その質問には答えず、ダルゴスの右拳に光粒の渦が巻いている。ため技か？

「マスター、手を開いて相手に向けて！」

言われた通り、空いてる左手を前に突き出す。

「ふんっ!!」

再度、ダルゴスは拳を俺に叩き込もうとして来る。

しかし、左手を中心に淡い水色のバリアーが展開され、それを防ぐ。ダルゴスの拳が当たっている場所は少し押されている感触があるが、十分防ぎ切れる範囲内だ。

そこで俺は左手に拳を作り、目の前の相手と同じ様に突き出してみる。するとダルゴスが防御姿勢をしたが、その状態で2、3メートル後ろへ引きずられた。

ダルゴスは形勢不利と踏んだのか、倉庫から逃げ出した。

「あつ、あいつ！エルフィ、追うぞ!!」

「はい、マスター!!」

倉庫から出て、急いで後を追う。

下駄箱にチラリと姿が見えた。ダッシュするも、下駄箱についた時には姿がない。

「どこだよ、一体・・・」

俺がそう愚痴っていると、外からガラガラ、と引き戸を動かす音が聞こえた。ということは・・・

「エルフィ、体育館だ！」

「はい、マスター！」

2人で体育館へと向かう。

扉は閉まっていたが、ダルゴスが中にいる事は確か。ならば、行くしかない。

「マスター、合図したら同時に開けて下さい！」

「オツケー、頼むぜ！」

こういうのって、アクション映画じゃお決まりだな。

「・・・せーのっ！！」

バアーン！

扉を開ける音が体育館内に響く。一歩中に入ってみたものの、暗くてよく見えないんだか。

（暗いですね・・・）

「そうだ」

な、をいう前に口を手で押さえられた。

人指し指を立てたエルフィの右手がそつと口につけられる。静かにしろってか。

俺が軽く頷くと、エルフィが押さえた手を離した。

（物音を聞き逃さないためです。びっくりさせて、すみませんでし

た。」

ああ、そういうことか。

（マスターが察した通り、ダルゴスの魔力反応はこの建物内にあります。つまり、ダルゴスはこの中にいます。でも……）

でも？

（ダルゴスの魔力反応がこの建物全体にあるんです。）

はぁ……サッパリなんだが。

目を細め、疑わし気な表情をすると、エルフィは勘づいてくれたのか、分かりやすく説明してくれた。

（ダルゴスがこの建物内のあちこちにいるという、あり得ない状況が起きてます。）

つーと、それは何だ。つまり、俺らは……

（ハメられましたね。私達を錯乱させる為でしょう。）

……聞かなけりや良かった。

タイミングを計った様に、あの声が体育館内に響き渡る。

「フハハハッ、気付いたか！」

正直、気付きたくもなかったがな。

「私が何処にいるか、分かるか？」

分かる訳ねえじゃん、隠れんぼとかいうレベルじゃねえんだし。

「どこだ！？出て来い、腰抜け野郎！！」

とは言ってみるが、こんなんで出て来てくれたら俺らも苦労はしねえ。俺らが逆の立場だったら絶対出て来ねえワ。

先に電灯をつけちまうか。

ブレーカーがある入り口を振り返ると、

「・・・ブツ壊されてやがる。」

予測済み、か。

直後、ダアーンと騒音を立てて扉が勢いよくスライドし、退路を断つ。

閉じ込められた・・・！

（危ない！）

何が、と聞くまでもなかった。

赤い光弾が、入り口付近の俺ら目掛けて四方八方から飛来している。

「・・・ッ！？」

とっさに左手を前に出し、バリアーを張る。

ダダダダッ

被弾する音が絶え間なく続く。光弾が当たった部分は、水面に雫が落ちた時の様にリング状の波を打っている。

俺の後ろでは、エルフィが焦りの表情を浮かべたまま瞑想し、神経を研ぎ澄ましていた。

「エルフィ・・・？」

疑問に思った俺は名前を呼んだが、答えは無い。
が、

「いました！真上です、マスター！」

即座に顔を天井に向ける。

一瞬影が動いた。同時に光弾の雨も止む。

「そこかぁー！！！」

俺は意識もせずに跳躍したが、魔法のお陰で優々と天井に届いた。

「チツ！！！」

ダルゴスは壇上へ一直線に逃避しながら自分の周りに出現させた赤い光弾数発を俺に打ってくる。

そのまま天井を蹴り返し、エルフィの元へ一気に戻る。すると、俺がいた天井に次々と光弾が直撃し、上から瓦礫が落下してくる。

「下がって下さい！」

そう言っただけエルフィも自分の周りに蒼い光弾を5、6発作り出す。

「行っ！！」

エルフィの振り上げた左腕に合わせて落下する瓦礫へと光弾が撃ち込まれ、粉碎する。

瓦礫を生み出した天井は大きな穴が空き、穴の周辺には剥き出しの鉄骨が見えた。

焦点をダルゴスに戻す。足元に魔法陣を展開し、右腕に魔力を集めて攻撃態勢に入っている。

「マスター！呪文を！心を研ぎ澄まして、思い浮かんだ呪文を唱えて！！」

俺は目を閉じ、意識を集中させる。

・・・・・・来た！！

「こんな時に神頼みか？死ねえー！ーッ！！」

ダルゴスのトドメの声が聞こえる。

俺は目を開け、八岐大蛇を右肩に抱えた状態で構えた。

ダルゴスに突っ込み間合いを一瞬で縮め、勝負をかける。

「湖水月！」

八岐大蛇に蒼光に包まれ、ひと回り大きくなる。
射程権内に入った時、ダルゴスの体を斜に切り裂く様に八岐大蛇を
振り落とす。

バキイイツツツ!!!

赤い拳と蒼い大剣が激突する。

お互いの魔力が反発し合い、火花が散る。

俺の八岐大蛇が相手の魔力に押され、手元が震え出す。

「くッ・・・」

倉庫では押し返したのに・・・

少しずつ俺の腕が曲がり出し、ダルゴスの拳が近づいてくる。

このままじゃ、やられるッ!!

「こっちにもいますよっ!!」

「何っ!?!」

いつの間に回ったのか、エルフィがダルゴスの背後に数発の光弾を
率いて準備していた。

「ファイア!」

ダルゴスはその場から上空に回避行動を取った。

光弾は向きを急激に変え、ダルゴスの後を追う。

「強くなってますね・・・恐らく、強化魔法を掛けているせいだし

よう。」

「道理で・・・」

ダルゴスはエルフィの光弾を殆ど処理し終えている。
勝ち目あんのか？

不安がよぎった時だった。

ドドカアーーーン

『！？』

体育館の壁から壁へ突き抜けて、桜色のビームが体育館を横断する。

「・・・・・・・・」

ええと、これは、何が、どーなってるんだっけ？

ダルゴスも驚いた様で、動きが止まっている。

そこに、壁の穴から誰かが入って来た。

白をベースにした服装で上は長袖、下はミニスカにハイソックスだ。
そいつの顔を見ると、

「た、高町！？」

こちらに気付き、すこしびっくりした顔で尋ねてきた。

「え・・・えっと、どちら様でしょうか？」

「あー・・・一年の高瀬だ。」

そりゃ、俺が向こうの名前を知ってるからって俺の名前を知ってるはずねえもんな。ちとガツカリだ。

「知ってるんですか、マスター？」

「そりゃあな。学校じゃ有名人だしな。」

「へえー、すごい人なんですなえー。」

いや、有名だからスゴイってのはどうかと思うが、今さっきの壁抜きを高町がやったっつーんなら、そりゃすげえ。っーか、恐れ。高町はダルゴスに向き直り、警告する。

「こちらは時空管理局です。武器を捨て、抵抗を止めて下さい。そうすれば、裁判における発言が認められます。」

「フン、今更白旗上げるきなどないわ！」

ですよねー。

「レイジングハート！」

「OK・Accel shooter。」

高町は桜色の光弾をいくつも出現させる。

「アクセルシューター・・・」

みるみる内に、光弾のエネルギーが上がり、

「シューート!!」

エルフィの光弾とは比べ物にならない速さで、しかもダルゴスを囲む様に撃ち込む。

「ぐはあああっ!!」

ダルゴスのバリアーを簡単に破壊し、本体を捉える。

「マスター、今です!」

「よっしゃあ!!」

俺は膝を曲げ、勢いを付けてダルゴスの元へ飛び上がり、一瞬で間合いを詰める。

「応えろ、八岐大蛇!!」

思い切り振りかぶって、

「湖水月!」

ぶった斬る!!

高町の攻撃で防御体勢が取れなかったのか、直撃した感触が手に伝わってくる。

直後、ダルゴスは床へと高速落下して行き、叩きつけられた。

俺も下へと着地する。

「器物破損および殺人未遂であなたを逮捕します。」

近づいて来た高町はそう言ってダメージを受けてボロボロになった
ダルゴスに光の輪を掛ける。

「なんなんだ、これ？」

「これはバインドって言って、拘束魔法だよ。」

・・・何気にアブナイ魔法を使うんだな。

「そっぴゃ高町、何でこんな格好し」

「なのは、逮捕した？」

んだよ、人が肝心なこと聞こうって時に。

声がした方を振り返ると金髪の美少女が――
――って、こいつ、確か・・・！？

「あ、フェイトちゃん」

「何イツー!!」

「マスター、あの方も知ってるんですか？」

「・・・ああ。今朝話題の人だったな。」

「へえ、あの方も有名なんですね。」

高町が何も無い所へ声を出す。

「転送お願いしまーす。」

すると、拘束されたダルゴスは姿を消した。どこかに飛ばされたらしい。

何よりも先に俺は現状を把握したい。

俺が視界にはいつたらしく、フェイトがなのはに尋ねる。

「そちらの人は？」

「ええと、同級生の高瀬君。って言っても、私も初めましてなんだけどね。」

「えっとDクラスのフェイト・テストロッサ・ハラウンです。こっちは私の相方のバルディッシュ。」

「Nice to meet you, sir。」

フェイトは右手にはデバイスを握っているため、空いている左手を差し出し、握手をもとめる。

「Bクラスの高瀬由宇だ。その・・・よろしく。」

その握手に応える。

「っと、私の自己紹介まだだったね。」

改まって高町がこちらを向く。

「高町なのは。フェイトちゃんと同じ、Dクラスだよ。そして私のパートナーのレイジングハート。」

「Hi・Your action was so good。」

「え、何だつて？」

「いい動きだったね、だつて。」

「そ、そうか。」

高町とも握手する。

「そっちの人は？お友達？」

エルフィに視線を向ける高町。

「あつ、いや、別に、そうじゃなくて、それは、えつと。」

「あの、私はエルフィって言ってマスターに遣えています。」

「お手伝いさん、とは違うのかな？」

「・・・エルフィ、ね。」

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「ううん、聞いたことある様な名前だっただけ。勘違いみたい。」

「そつか」

「それで、お前らは一体何をやってんだ？しかも、こんな格好で？」

先に聞いとかねえと、いつ横槍が入るか分からんからな。

「私達は・・・なのは、言っただいかな？」

「うーん、ここまで来れば、ね。」

『？』

俺とエルフィはそろってハテナマークを浮かべる。

「取り敢えず、ここで話すのもなんだし外に出ようか。」

と言う訳で、体育館の外へひとまず出る。

出る前に改めて体育館の内観を見ると酷い有様だった。

ダルゴスが放った光弾で開けられた天井の穴。俺がトドメを刺した時に出来た壁の一直線の切り口。一番酷いのは、やはり高町が壊したと思われる魔力砲の後だろう。わざわざ壁をブチ抜いてどうする気だったんだよ。

で、体育館を荒らしとして後は知らんぷり、という訳にも行くまい。修繕費だけで億単位は間違いないだろう。そんな金、ウチにはねえぞ。

帰ったら何て言えば・・・

怒鳴れて済む額じゃねえし。

「エルフィ、夜逃げするぞ。」

「ま、マスター？」

許せ、エルフィ。こうするしか、こうするしか道が・・・
ボーゼンと立ち尽くす俺を見て、高町が気付いたらしい。

「どうしたの？」

「マスターが夜逃げするって・・・」

「・・・ああ！そういうこと。」

少し考え、俺の思ってる事が分かったらしい。なのに、腹を抱えて
笑い出す。

「ハハハハッ、な、何だ、そんな心配して、アハハハッ。」

「はあ！？笑い事じゃねえんだぞ！？」

こいつ、笑い泣きしてやがる・・・
暫くして笑いが収まって、高町が話す。

「ゴメン、気分を悪くしたよね。謝るよ。でも、これはちゃんと魔法で直せるから、心配しなくて良いんだよ。」

「は・・・マジかよ？」

心配して損したぜ。ツたく・・・

「もうすぐ修理屋さんが・・・キタキタ♪」

高町の視線を追うと、誰かがこちらに飛んで来ている。

「いやあ、ゴメンゴメン。敵さんが張った結界を侵食するのが意外と手間取ってな。」

「お疲れ様、はやて。」

「お疲れ、はやてちゃん。」

・・・ああもう理解が出来ん。

「ん？そっちは・・・あ！」

「さっきはどうも。」

軽く皮肉を込めたつもりだったが、全然気付いてねえ・・・

「えっと、た・・・たか・・・そや、高木くんや！」

「高瀬だ！！」

名前まで忘れられてるし・・・

「この人ですか、マスター？」

「さあな。そこまでは知らねえ。」

と言うより、全員何のコスプレしてんだってカンジ。
そんな俺も変なカッコだな。

「ゴメン！人の名前を憶えるのは苦手なんよ。最近はなんや難しい名前も増えてきてな。」

俺の名前は難しい分類なのか？

「リインが最後のチェックに回ってくれてるから、もうちょっとだけ待ってな。」

「じゃ、その間に説明するね。」

と、高町が切り出す。

- - - - -

「へえ、そういうことか。」

何ともまあ、複雑だな。

いつも早退していたのは、時空管理局とかいう機関に所属し、勤務があるためらしい。ちなみに今日丸一日休んだのは、この海鳴市に侵入した古代遺産ロストログアと、それを狙う人物の情報が明け方に入ったため、搜索をしていたそうだ。狙ってた人物がダルゴスなのは明らか。

「そんじゃ、そのロストログアってのは・・・」

「高瀬君のデバイス、エルフィだね。」

「・・・やっぱ、危険なのか？」

「うーん、デバイスの詳細をまだ知らないから、それは何とも言えないかな。」

「そうか・・・」

エルフィが心配そうな目でこっちを見てくる。

「もし、私が危険だと判断されたらどうなっちゃうんですか？」

「対象物の破壊、もしくは時空の狭間に封印、かな。」

「お、おい！？そりゃいくら何でも酷くねえか？」

「まあまあ落ち着いて。まだ危険物として扱われてる訳やあらへんし。」

「はあ！？エルフィがいなくなるかしんないってのにか！？」

黙って見ていられる訳がない、そんなこと！

「その可能性は低いと思うよ。」

「へっ？今なんて・・・？」

それまで黙っていたフェイトの発言に、拍子抜けする。

「まず、見るからにエルフィはユニゾンデバイスであり、暴走などで重大な危害は加えてないこと。次に今回の事件でなのは助太刀、

つまり管理局側の援護をしたということ。これから下される結論は、恐らく監視が一番妥当な線になると思う。」

「監視・・・？」

「そう。そして出来るだけ監視しやすい立場の人間が選ばれるだろうから、監視するのは私達だね。」

「具体的には同じクラスの私やね。」

「八神、か。」

まあ、エルフィと離されるよりはこっちの方がまだまだ楽だな。

「ただ、今から詳細を調べたいから今夜だけエルフィを預からせて貰っていい？」

一晩だけなら、俺は構わないが・・・

エルフィを見ると、少し物寂しそうな表情をしていた。

「ちゃんと、マスターの所に返してもらえますか？」

「うん。それは約束する。」

「マスター？」

「一晩だけだろ？スグじゃねえか。」

「・・・はい！」

エルフィも承諾してくれた。

「あつ、リインからOKが来たんで、修復せんとね。」

そう言つて八神はデバイスを掲げる。

すると、細かい粒子が破壊された部位に集まり、次第に初めの体育館へと戻つた。

「魔法つて、ホントすげえな。」

そう独り言をいってると、エルフィが俺の袖を引っ張る。

「マスター、最後に・・・」

「？」

エルフィが手をさし出す。

「これから、宜しくお願いします！」

「ああ、ヨロシクな。」

その手を握り、エルフィの温かみを感じた。

「それでは。」

すると、エルフィは蒼い光の玉となり、俺の服装も元の制服に戻つた。

そして俺の目の前には中に浮くダイヤもどきが現れ、その中に光の玉は消えていった。

「はい、これ。」

ダイヤもどきを掴み、フエイトに渡す。

「そしたら、今日はこれで。また明日ね、高瀬君。」

「おう。じゃあな。」

「高瀬君もお疲れ様。」

「フエイトもな。お疲れ。」

「今度はしっかり脳にインプットしたでえ〜!」

「・・・ホントかよ?」

ハハハッ、と笑いが起こる。

そして3人とはその場で別れ、俺は学校を出て、家に帰った。

「ただい・・・ま?」

玄関で母さんがMK5の形相でお出迎えしてくれた。

「ゆう!今何時だと思ってるの!」

いつ!?今何時だっけ?

ケータイで時間を見ると、じゅ、十時!?

「いやそのこれには海よりも深い訳があつて」

「そんな言い訳聞くとでもおもつてんの!？」

「だから、俺は悪い奴に狙われてる女の子を助けたんだつて!」

「あんたが女あ!？馬鹿じゃないの!？嘘言うならマトモな嘘言いなさいよ!」

「いかん、デジャヴが。」

「そして、頼んでたお肉は？」

「あつ!？」

グランドだ。エルフィ抱いて逃げる時に放り捨てたんだ。

「それも忘れて来て・・・」

「だから、女の子を助ける時に」

「あんた晩飯抜き!!」

「そりゃねえーよお・・・」

第2話 「エルフィ」(前編)(前書き)

作者の都合により、内容を編集する場合があります。
ご了承ください。

第2話 「エルフィ」(前編)

2次創作3

「一人やられた、か。」

暗い部屋の中、男がモニターを見つめる。

「そんなことはどうでもいい。代わりなんぞ、腐るほどいる。」

腰の辺りに現れた光学センサーのキーボードに数値をカタカタと打ち込んでいく。

「良いデータが取れたな。そう思わんか、レーナ?」

びびっ、びびっ、びびっ

・・・っ、っせえ。

ガンッ、ガシャーーン

ぴぴっ、ぴぴっ、ぴぴっ

Z Z Z

「ゆうー、遅刻するわよー」。

・ ・ ・ Z Z Z

ん？今何時だっけ・・・？

時計は・・・あれ、いつもの頭元にねえぞ。どこにいったん、お？
なんで床に転がってんだよ。ったく、誰だよ床に勝手に置きやつて・・・

・・・あ！？8時過ぎてる！？完璧遅刻じゃんよ、これ！？

急いで支度しねえと、制服、制服！きよ、教科書は・・・入ってんな、よし。

俺は学校へ行く準備を済ませ、直ぐに1階へ降りていく。

「母さん！どーして起こしてくれなかったんだよッ！？」

「起こしたわよ。あんたが起きなかっただけでしょ？」

「それは起こしたって言わねえんだよ！ああ、もう朝食抜きでい

い！」

そう言つて俺は自宅を飛び出し・・・飛び出し・・・あ、あれ？ドアが開かねえ。

「母さん、ドアぶつ壊れてんぞー。」

「ああ。それ、ワザとよ。」

・・・はい？

母さんが玄関にやってくる。

「あんた、昨晚高町さん、八神さん、ハラウンさんの娘さん達と一緒にいたんだって？」

「な・・・どうしてそれを！？」

「今日は学校行かないで、母さんとじーーーーーーつくり、お話しようか？」

「お、俺、ほら学校で色々目付けられてるからさ。いや、その目を付けられてるつてのは悪い意味じゃなくて、友達から慕われてるから、俺がいなかったら心配掛けんじゃん？だからさ、ちよ、そんなえ、なんでロープとガムテ持つてんの？縛るとかないよな、母さんS趣向じゃねえだろ？ね、ほら俺遅刻し・・・ギャーーーーー！ーッ！！」

ガバツ

は・・・な、何だ、夢か。良かったあ・・・
全身汗びっしょりだ。春先だつてのに。

「時間は・・・・・・・・」

6時42分。少し早めの起床だ。

昨晩は許しを乞いた拳句、飯にありつけたのだ。嘘じゃなかったのに。

まずはリビング行くか。

「おはよー・・・ふああ。」

「おはよ。あら、珍しいわね。ゆうがそんなに早く起きるなんて。」

「昨晩色々あったからな。」

「あんたが悪いんでしょ。」

「ヘイヘイ。」

テレビをつける。昨日は何もニュースを見ていない。こんな俺だが、

意外と社会情勢には興味があつたりする。こんな性格だから学校の情報収集にも目が光るのかもしれないな。

ニュースで重要なのは外相がフランスに訪問したつてのと、内政について位だ。他はどうでもいい。

「朝食まだ？」

「もうすぐ出来るから、待って。」

この高瀬家、一人っ子の俺と母親しか家にはおらず、父親は単身赴任で沖縄だ。いいよなあ、南国。

こういう状態だと、母強し。主導権は母親。ずっと母さんのターンだ。別に居心地悪くはないけどな。これはこれで楽しいし。

さて、飯が出来たみたいだ。テーブルの準備をして、ご飯、おかず、味噌汁を運び、朝食に移る。そしていつも通りの登校だ。

「いつてきまーす。」

「気をつけなさいよー。」

母さんが玄関に見送りに来た。

「言われなくても分かってるって。」

そう言つて、家を飛びだ・・・

「よし、開いてる。」

「なにしてんの、あんた。」

「い、いや何にもッ。」

飛び出す。

基本、俺は一人で登校してる。途中で友達と会えば一緒に行くし、会わなければそのままだ。
今日も誰とも会わずに行くはずだったのだが、

「おっ、高瀬君やん！」

「あ・・・八神。」

「なんや、元気ないなあ。」

「ああ、昨日は色々あつてな。」

「その色々って？」

「・・・話したくないから、『色々』って言ってんだろ。」

「冷たいなあ。そういう性格してると、女子にもてへんよ?」

「余計なお世話だ!」

大声出したから、周りの通行人からチラチラ見られる。

「ッたく・・・何の用だよ?」

「用なんてあらへんよ。高瀬君が見えたから、挨拶しとこかと思うて。」

「何もないのかよ・・・」

こういう奴に監視されと思うと、気が重い。

「で、あれから少しでも進展したのかよ？」

「そやね。少なくとも、エルフィちゃんについては情報が集まってきたよ。」

「ホントか!？」

「詳細は今日の・・・って、そやった。言わないかんことがあったんよ。」

「結局用があんのかよ。」

「今日、お昼に下校してくれへん？」

「え、は!？」

「つまりは早退や」

「・・・話がみえねえんだが。」

すると、八神は真面目な顔になって話し始める。

「ちょっと付き合っただけの所があるんよ。なのはちゃん、フェイトちゃんも一緒にな。」

「・・・どこだよ、そこ？」

「それは、後でのお楽しみや。」

再び笑顔に戻る八神。

「エルフィちゃんもそんな時に返すよ。ほいなら、私先に行くから。」

「お、おう。」

「あと、私のコトは『はやて』でええよ。それじゃ。」

「あ・・・ああ。」

いきなり呼び方変えろってのもな。でも、やっと名前憶えてくれたみたいだし、良しとすつか。

そして学校に着き、下駄箱に靴を入れ、1-Bへと向かう。教室に入って早々、なかやんが俺に急接近して来た。

「どうした？スクープか？」

「・・・ああ、スクープや。だからちょっとツラ貸せ、由宇。」

「はあ？」

「いいから来い！」

「ちょ、ちよつと待てよ、なかやん！」

俺はなかやんに腕を引つ張られ、男子トイレまで連行された。

「もういいだろ！？だから一体なんなんだよ、お前は！？」

「由宇、ワイとお前の友情はそんなモンだったんか！？」

「？」

理解が来るん。

突然、なかやんが泣き出した。

はやてと同じ関西弁（？）なのだが、声が低くてだみ声っぽいので、似ても似つかない。正直、それで泣かれると気持ち悪い。

「今朝、お前と八神さんが一緒に登校しとるっちゅう噂を耳にしたんや。」

「ああ、そんなことか。」

「そんなコトやないねん！！なんでワイには教えてくれなかったん？二人の仲がそこまで行っていることを！？せやなければ、ワイは、ワイは・・・ううっ。」

あー、何で泣き崩れてんのか分かった。

「お前、はやてのこと好きなんだ？」

「うわあああッ、名前で呼び合う仲間なん！？もう嫌やああーっ！！！」

そりゃ、名前で呼んでって言われたから。

・・・これは今のこいつに禁句だな。

「何の勘違いをしてるかは知らねえが、そんな仲じゃねえぞ。」

「グスツ。じゃあ、何で名前なん？」

「そ、それは、名前の方が堅苦しくねえかなあーって。な、お前も親しくなりやすいと思わねえか？」

「せ、せや。それはナイスアイデアや！でも、登校が一緒っていうのは」

「だ、だから、・・・時間割り、そうだ、時間割りを俺に聞いて来たんだ。偶然、同じクラスメイトを見かけたからって。その後すぐに別れたし。」

自分でも裏声になっているのが分かる。

「・・・せやな、由宇如きに好感を抱くハズがあらへんもんな。」

ム力つくが、抑えろ、俺・・・

「・・・いいから早く教室戻ろうぜ。話しかけるチャンスが減るぞ？」

「お、おう！」

立ち直りが早くて助かった・・・

「それはそうと由宇、別にスクープがあるんや。」

「うん？内容は？」

「へへ、絶対使えると思うで。」

「もったいぶらねえで、早く教えろよ。」

「それはな、*****ということなんや。」

「・・・使えるな。」

早速使えそうなモンが転がってきたな・・・

俺たちは教室に戻り、1限目の準備をする。俺がバッグから教科書を取り出している時に、なかやんがはやてに今日の時間割りを聞いていた。分かりやすいな、あいつ。

あ、早退許可書とつてこねえとな。

ということ、職員室に向かう。

「失礼します。1-Bの高瀬由宇です。酒井先生いらっしやいますかー。」

「入っていいぞあー。」

酒井先生は1-Bの担任だ。36歳♂。独身で数学担当。えくぼがチャームポイント（自称）だ。

酒井先生の机まで歩いて行く。

机の上は、朝礼のプリントが中央にあって、教科書や授業プリントが山積みだ。拳句に、山頂にはコーヒークップときたもんだ。こぼしたくなる。

「先生、今日早退します。」

「お、どうしたんだ？」

さあ、正念場だ。

「あの、午後から用事があるんです。」

「だから、それは何だ？」

「言えませんが、急用です。」

「・・・自分で何言ってるのか分かっているのか、高瀬。」

「はい、分かってます。イヤあ、先生も今日は早退するんでしょ、あのヒトと。」

俺が指差す先には、教頭にお茶を注いでいる事務の姉ちゃんがいる。

「な、何の事だ。」

「それがあ、風の便りで聞いたちゃったんすよ。あのヒトとイイカンケイなんだって。」

そつ、なかやんが仕入れた別のスクープとは、酒井先生の恋愛事情

だ。聞いた話では、先日先生と姉ちゃんが仲良くデートしてたらしい。そして別れ際に明日の、つまり今日の午後空いてるか聞かれ、OKしたそうな。

この年で婚期は最後と思っているのだろう。しかし、デートを理由に公職をすっぱかして学校を休むなんぞ言語道断である。バレたら停職だろうが、それだけでは済まずに保護者からの批判が殺到する。結局は退職モノだ。

「さあ、どおします、セ・ン・セ・イ？」

「……分かった。」

「有難うございます。」

「いやったあー！！」

内心早退できる事よりも、弱みを握った快感で一杯だ。

「だが、せめて理由くらい聞かせてくれ。その、なんだ……俺も公にはしないから。」

まだ追撃は出来るが、負けを認めて更に攻撃するのは酷だ。これ位にしとくか。

「八神さんと同じ理由です。」

「……そう、なのか。」

高町、フェイト、はやて達はどうしても外せない家の事情という事になっている。その事情を酒井先生は勿論知らない。

酒井先生は引き出しから早退許可書を取り出し、サラサラとペンを

走らせる。

「ほら。」

「有難うございます。」

ミッションクリアだ。

さてと、教室に戻るか。

第2話「エルフィ」（後編）

キンコーンカーンコーン

「はい、では今日はここまで。」

「きりーっ、きょーっけー、れー。」

『あーざーしたあー』

はい、ありがとうございましたと。授業はこれで終わりかあ。小学校以来か、平日に午前中で授業終わるの。さて、翠屋に行くか。

実は職員室から戻ると、机の中に置き手紙があった。

「授業終わったら、喫茶翠屋に集合や。遅れんようにv

はやて」

喫茶翠屋は海鳴市で有名な喫茶店で、連日夕方には学生で賑わう。休日ともなれば大盛況だ。

高町の両親が経営してるというのもこの学校じゃ有名で、休みには高町も手伝うことがあるらしい。それ目的で来る学生もいるんだとか。

今から昼食の時間なので、俺と目的は違えど校外に出て行く生徒は多い。だから、コソコソと隠れて校門も出る必要はないのだ。それでも誰に見られているか分からないため、病院方向の道へと進む。

暫く歩き、生徒の姿が見えなくなったら喫茶翠屋へ足を向ける。

喫茶翠屋の外装はその名前通り翠色の看板が目印だ。

それは良いんだが、13:00〜13:30は貸し切りとある。これはマズインじゃ？もうすぐ13時だしな。

すると窓から高町が俺を見ていて、手招きしていた。入ってか。じゃあ、この貸し切りはまさか俺らのため！？学生のためなんかに店1つ貸し切るのは気分悪いな……カランコロン、と心地いい音を立てて扉を開く。

「いらつしゃいませー。」

「いらつしゃい。」

挨拶をしてくれたのは、所謂高町の両親だ。

高町は俺と同じ16歳で、しかも兄と姉がいるというモンだからうちの親より幾分歳上のハズ。なのに外見は20代後半だ。是非とも俺の母親に爪のアカを煎じて一気飲みさせたい。

「遅いでえ〜！」

しゃーないだろ。これ以上の変な誤解を生まないために迂回して来

ただから。

4人はカウンター席に座って・・・あ、4人!?
端にいる奴は、

「あ、マスターッ!!」

「エルフィ!!」

椅子からポンツと飛び降りて、こっちに駆け寄って来る。
つか、おいエルフィ、スピード落とせ!このままじゃ、

ドカツッ

エルフィが助走をつけて俺に抱きついたせいで、俺とエルフィはそのまま倒れこむ。

後で思ったが、後頭部を無意識に避けていたのは幸いだった。もし直撃していたら、バカに磨きがかかってしまう所ではなく、死んでいた可能性もある。シャレにならないぞ・・・

「マスターッ、会いたかったですよーっ!」

「ぐ、ぐるじ・・・」

頼むから、その腕をどけてくれ!息が出来な

むか

へ

む

や

わ

おい、ゆー。こっちはたのしーぞー。

あれー、じーちゃん。そこでなにやってんだー。

ゆーれーせーかつだー。ゆーれーになつたら、あーんなことやこーんなことができるぞー。なんてったってー、ゆーれーだからなー。

あーんなことやこーんなことってなんだー。

それはー、おとこのろまんだー。

そーかー。じゃーおれもそっちいくー。

そしたらー、かわをわたれー。

そこのかわかー。

そうだー。これでー、ゆーもゆーれーせーかつをえんじょいできるぞー。

えんじょいかー。

えんじょいだー。

「エルフィちゃん！意識が無くなりよるで！絞め過ぎや！」

「あ・・・ゴメンなさい。」

「・・・・・・・・っ！？ここは？」

「み、翠屋だよ？」

高町が不安そうな目で見ている。

「あ・・・そうなのか。戻ってこれたのか。」

「マスター、どこかに行っていたんだですか？」

「綺麗な川が目の前にあってな。向こう岸でじーちゃんが手を振ってえエンジョイっつーたから、渡って会いに行こうと。」

「え、エンジヨイ？」

「そ、エンジヨイ。」

高町の目が痛い子を見る目が変わった。どーしたんだよ？

「・・・ごめんなさい、マスター。私のせいで、とうとう・・・」

「いや、は！？俺は至って普通だ！！」

「・・・ええんやで、高瀬君。例え今までの高瀬君じゃ無くなつたとしても、私たちはちゃんと受け入れるから。」

『うん。』

「全員そろって頷くんじゃねえーーーーーッ！！！」

は、話が一向に進まねえ・・・

こういうときゃ、話題を変えるっきゃねえな。

「でも、貸し切りなんて良かったのかよ？昼食時だぞ？言い方悪いけど掻き入れ時なんだぜ？」

「はっはっはっ、それは気にしないで、高瀬君！」

答えたのは高町パパ。

「なのはから事情は聞いているからね。重要な話し合いなんだろう？」

「はあ……まあ。」

「そしたら存分に使ってくれていいさ。私達に出来るのはこういうことくらいなんだから。愛しの娘が困っている時には、助けてあげないとな。」

「ねえーっ、と高町ママに合図する。」

「そうよ。私達のことは気にしないでしっかり話し合ってちょうだい。」

「ありがとう、お父さん、お母さん。」

「ありがとうございます。」

ウチの無愛想な母さんとは違い、優しい両親だ。

「だから高瀬君！例え君が今までの君じゃ」

「あんたは俺の過去を知ってんのかっ!？」

前言撤回。偽善者だ。

「ツツコミ所が違っで、高瀬君。」

俺は何をしに喫茶翠屋「」に来たんだ――――!?!?!?!

「はっはっはっ、冗談だ高瀬君!」

「……俺、エルフィ連れて帰るぞ？」

「時間が無いし、始めよつか。」

「えっ、俺スルー！？」

鮮やかなシカトで高町が本題に戻す。

カウンター席の一人用丸椅子を円上に6つ並べ、半時計回りに高町、はやて、フェイト、俺、エルフィの順に座った。一同に軽い緊張が出る。

「さて、まずはエルフィちゃんについてから始めるね。」

フェイトが切り出す。

「昨晚から調査させてもらったんだけど、第二級ロストログアに指定されています。つまり、かなり危険度が高いということ。」

「そんな、根拠はなんだよ？」

「それは」

「私が言います！」

エルフィが突然名乗り出た。

「その、私は随分昔に前に博士によって作られました。『誰にでも

魔法を』をモットーにしたデバイスの設計士だったんです。」

「へえ、他の人のことを考えてくれてんだな。」

「はい。魔力が無い人にも使えるように、と。」

エルフィの顔に影が差す。

「作られたのは他にも沢山いるんですが、どれもこれも失敗ばかり。魔力保有者が使うアームデバイスは最高品を数多く作っていたんですが、一からユニゾンデバイスを作ると誰にでも使えるどころか、使用中に暴走して主人の命を奪ってしまう。その問題をどうしても超えられず、断念しかけていたそうです。そこで、他の開発者のユニゾンデバイスの基盤を手に入れ、それを元にして作られたのが私でした。」

「・・・っ、おい！？元の基盤ってなんなんだよ！？」

「私にも分からないんです、マスター・・・。」

「・・・すまん。つい、ムキになって。」

エルフィがまるでコピーのような気がして、嫌だった。

「いいんですよ。それだけマスターは私のことを考えてくれてるだけで、ありがたいです。」

「良かったね、パートナー想いのマスターで。」

「そ・・・そんなじゃねえっ！フェイト、余計なこと言うな！」

ごめんごめん、とフェイトは微笑みながら謝る。

「えっと、続けますね。当初の計画では、誰にでもユニゾンデバイスの最大エネルギーを出すことが目標でしたが、それは達成されず限られた人にしか使いこなせない普通のユニゾンデバイスになってしまったんです。そこで博士は今まで開発してきたデバイスの、最高峰の技術を私に組み込み、リミッターを掛けました。巨大な魔法は封印して、基本的な魔法だけ使えるようにしたんです。博士は私にこう説明しました。その封印を解けるのは、私と心を通わせる魔導士だけだ、と。」

「・・・・・・・・」

「暫くして博士は交通事故に会って死んでしまい、博士の開発品を狙った人たちが設計図や完成品をこぞって盗んで行きました。その時、私は極秘に製作をされていたために研究室最深部のエリアに厳重に保管、ロックされて私の保管場所や設計図も残っていないかたはずでした。でも最近になって保管場所が判明したらしく、突然ロックが壊されて何人も人が保管室へ入って来て。おそらくは、私を分解してリミッターを解除し、模造品を作るのだと思います。」

「・・・・・・・・それから、ずっと逃げてきたってのか？」

「はい。転送機能は無かったので、他の魔導士が転送する時に荷物の中に紛れたりしました。その間も念通で助けを求めましたが、誰も聞こえていなかったみたいでした。そして、保管室に入ってきたうちの一人が私を追いかけてきて、逃げるのに必死だった私は誤って時空空間に入り込んでしまったんです。辿り着いた先がこの世界でした。でも魔力を殆ど使い果たしてしまって動けずに、これで私

は捕まっちゃうのかなって思っ。最後の最後だと思っ。て神様に祈っていたら、本当に奇跡みたいに、マスターが来てくれて……」

えへへ、とエルフィが照れる。

「……余計な事まで喋っちゃいましたね。すいません。」

「いいよ。嬉しかったんだもんね。」

「……はい！」

「そして高瀬君が奇跡的に適格者だったために、高瀬君からの魔力供給で再び魔法が使えるようになった。」

「そうですね。」

「俺からの魔力供給？」

「それは私が説明しよか。」

はやてが話を引き継ぐ。

「私もユニゾンデバイスなんやけど、管制人格が使用する魔力はその使い手の魔導士から供給されるんよ。供給量には制限があつて、使用者の魔力使用に影響を与えない程度。とは言っても、ユニゾンデバイスの魔力資質を持つ魔導士は魔力量が桁違いに多いのが普通だから、気に止める必要はないんよ。ラインがおつたらもう少し説明しやすいねんけど、生憎今は管理局の書類整理に追われててな。」

「ただ、適格者が現れた今はリミッターが外れる可能性がある。その場合、暴走しないとも限らないから対処が迫られるの。」

え・・・それじゃあ、高町が言ってた通りになるのか？顔の血の気が引いていくのが感じられた。

「しかし、ユニゾンデバイスであるため使用者が限られるから24時間監視を条件とする特別許可をもらったの。」

「に、24時間！？どうするっていうんだよ？」

「そこでや。」

はやてが俺を制止する。

「24時間監視を止める抜け道がひとつだけあるんよ。それが囑託魔導士。」

『しょくたく・・・』

俺とエルフィの声がハモる。

お昼前のお料理番組「4分クッキング」のイントロが頭の中で奏でられる。

今日の料理は鱈のカルパッチョ。

「・・・それは、無理だ。」

「えっ！？唯一の抜け道なんやで！？」

「俺には何も作れない。ましてカルパッチョなんざ無理だ。」

『?』

高町、はやて、フェイトが眉をひそめる。

「な、何だよ？ねだったって何も出ねえぞ？」

「・・・エライ間違いをしとらん、高瀬君？」

「は？」

「囑託魔導士を一体何だと思ったの？」

「そりゃあ、お前らの朝昼晩のメシ作りとか。」

「・・・えっと、そっちの食卓じゃないかな。」

「・・・え？」

「管理局直下のフリーの魔導士みたいなものだよ。」

「・・・そ、そうなんだ。」

は、ハズイ。

「ま、回避策としてはやけどな。」

「うん。そっちの方が、捜査もはかどるだろうし。」

「捜査？」

「それが、昨日捕まえた犯人なんだけど。」

高町が溜息をつく。

「一向に供述をしてくれないらしくて、今かなり手間取ってるみたい。管理局の人物リストにもデータが無かったし……」

「管理局のデータって、そんなにすげえのか？」

「一般人は勿論、各世界の手配者から既に死亡した人まで登録されているの。」

「俺も？」

「そつだよ。」

知らない内にリストに登録されているとは、薄気味悪い。

「但し、エルフィちゃんが言ってる博士って人になってくると、相当昔の古代ベルカの時代になっちゃうからデータベースには無いんだけど、」

高町が資料を取り出す。

「全ての世界の本が限りなくある無限書庫って所から調べてもらったの。シャン・ヌズイーユ技師。第53管理局管理世界出身のデバイス技術者。25年以上に渡ってデバイスの開発を行う。古代ベルカの最も普及したデバイス、アームドデバイスの開発を得意としており、評判は高い。」

エルフィの言った通りだ。

「でも、分かったのはこれだけ。エルフィちゃんの記述も無いし、開発したデバイスの名前も種類も見つからなかった。」

「で、行き詰まったってのが現状なんよ。」

「そしたら、俺らに求める用件ってのは囑託魔導士になって捜査の協力ってことか？」

「だね。」

エルフィは俺をじっと見つめている。全てを俺に一任してくれるらしい。

「・・・分かった。協力するぜ。」

「よっしゃ、そうと決まったら早速次の場所に行かなあかん。」

「どこだよ、そこ？」

「それはやな」

「紳士淑女の方たち、ちょっと待ってくれるかい？」

偽善者高町パパが呼び止める。

「せっかくだから、新作のケーキを食べていってくれ。評価も聞きたいしね。」

「ホンマですかあ？やったあ」

「すごい楽しみ。ね、なのは。」

「うん」

「高瀬君もエルフィちゃんも遠慮しないで食べていってね。」

「すみません、ありがとうございます。」

「はあい」

「いつでも来ていいからね。サービスするよ。」

こうして高町パパ、ママのご厚意で、みんなでケーキを味わいながら憩いのひと時を過ごした。

「で、どこだよ、次の行き先は？」

「ケーキ食べ終わってからや！」

「・・・はい。」

第3話「管理局」(前編)

俺たちは喫茶翠屋を後にし、今日の目的地へと向かった。

「着いたよ。」

「ここが？」

そこは海を埋め立て、建設された公園。海の眺めが良く、太陽の反射光でキラキラと輝いている。カップルのデートスポットだ。

「別にここじゃなくてもいいんだけど、昼間は人気が少ないから丁度良いんだ。」

「それでは、やりますか？」

はやてはヤル気十分だ。

「やるって、何をだ？」

「……空間転送、ですか。」

「エルフィちゃん、あつたりい？」

「違う場所に飛ばされるのか？」

「そやよ。そこが楽しみの場所や。ま、私は転送できへんから二人にお任せや」

「なのにテンション上げてんのかよ・・・」

「フェイトちゃん。準備はいい？」

「いつでも、なのは。」

お互いコクン、と頷きあつて高町には桜色の、フェイトには黄金色の魔法陣がそれぞれの足元に展開される。

「レイジングハート」/「バルディッシュ」

『空間転移！』

「Ok, master」/「Yes, sir」

突然、目の前が真っ白な光で包まれて何も見えなくなる。

しかしすぐに視界が回復し、先程の海の光景はそこに無く、全面金属で構成された冷たい廊下が前方に伸びていた。

「そのまま進んでね。」

言われた通りに歩いて行くと、広いロビーに繋がっていた。ロビーには全面ガラス張りの壁があつて、外の光景は

「・・・何だよ、これは！？」

寒色系の色を適当にかき混ぜた様な、暗い空間があった。

「マスター、ここ、時空空間ですよ・・・！」

エルフィが誤って入ってしまったという、俺と出会うキツカケを作った空間。

もう少し、明るいモンかと思ってたぜ・・・

「そんで、いい加減教えてくれて良いだろ？ここはどこなんだよ？」

高町、フェイト、はやては声を合わせて、教えてくれた。

『せーのっ、ようこそ時空管理局へ！！』

- - - - -

時空管理局。その名の通り、混沌とした時空を管理する機関である。本局は時空内に設置されており、正に時空に浮く要塞だ。中では何十万という管理局員が日夜勤務に当たっている。管理局に勤めるのは魔導士だけとは限らず、魔法を使えない局員も高度な事務作業を処理しており、無くてはならない存在なんだとか。それから云々・・・

「- - - - -と、いうことだね。」

・・・はあ、どういふことでございましょう？

高町が管理局を延々と語ってくれた。

正直、そんながーーーーい説明受けたところで、聞く気が失せる。途中からは相槌だけ合わせていたから、内容を憶えてねえ。

「高瀬君、何か質問ある？」

「・・・・・・何も。」

取り敢えず俺らは嘱託魔導士の申請書と登録を済ませて、別れることとなった。フェイトは事件の整理をしてくるらしく、はやてはリーンの仕事を手伝うと言うことらしい。

で、高町がガイドとなり、俺とエルフィのために見学ツアーを即席で催してくれたんだが、逆にありがた迷惑だった。

「エルフィちゃんは？」

「えっと、管理局局員さんの訓練がどんなものか良かったら見てみたいです。これからはマスターと私もしなければいけないと思うので。」

「そう言われりゃ、その通り。」

管理局の一員として、まずは戦えなけりゃ話にならねえ。

「そうだけ、試しにやらせてくれよ。」

「そうだね・・・実際に体験しておいた方が良くかも。」

おっしや、そうと決まれば早速訓練だ。

「それじゃ、訓練室に行こうか。」

高町に案内されて、訓練室に向かう。

と、途中で何人もの局員から高町は声を掛けられる。

「高町空尉、お疲れ様です。」

「なのはさん、お疲れ。」

「た、高町、いいい、一等空尉。おお、お、おつかれさまでスッ！」

最後のヤツはやけにテンパってたな。

「はい、お疲れ様です。」

「うん、お疲れー。」

「・・・お疲れ？」

高町も反応に困ったらしい。

「すっげえ人気モンだな。どーしてだ？」

「あはは、何でだろうね。」

「・・・答えになってねえ。」

「あつ、なのはさん。お疲れ様でーすつ。」

高町を見つけて、こっちにかけて来る局員がいた。

「テーニャ！？久しぶり〜」

暫く会っていなかったのか、二人はハグする。

「やっと事件が片付いたんですよ。」

「かなり面倒な事件だったんもね。」

「そうですよ。犯人候補が複数挙がるし、被害者は特徴を殆ど憶えてないし、証拠は出てこないし。サイアクでしたよ。」

それって解決すんのか？ 迷宮入りしそうな路線をバリバリ辿ってる様にしか聞こえんが・・・

「まあまあ、片付いたんなら今日はどこか食べに行こうか。お祝いも兼ねて。」

「ありがとうございます。」

テーニヤとか呼ばれてる女性局員は、黒髪が肩にかかるほどの長さだ。顔立ちは日本人っぽいな。

「そちらのお二方は？」

ハグに満足したのか、高町から離れたテーニヤは俺たちに目を向ける。

「あ、紹介するね。こちらは高瀬君とユニゾンデバイスのエルフィちゃん。」

「高瀬由宇だ。ヨロシク。」

「エルフィです。よろしくお願いします。」

「そして、こっちはテーニヤ。所謂仕事仲間って感じかな。」

「はいっ。ごしょーかいに預かりましたテーニヤ・ネズリーですっ。よろしくうー！」

はやて並にテンション高えぞ。またややつかしいヤツと知り合いになったモンだ・・・

「んゝ、格好からして、一般の方？」

「そうだよ。私と同級生ゝ」

「へえゝ、じゃあ私と同年ですねゝ。」

「え、同年！？なのに敬語使ってるのか！？」

「私はタメ口で良いって言ってるんだけど・・・」

「だって、なのはさんは管理局のエースオブエースですよゝ？敬語じゃないと、示しがつきませんではあゝ。」

「エースオブエース・・・？」

「名前の通り、エース中のエースですよゝ。めがっさ強いんですからあゝ。」

・・・そついや、昨日体育館の壁をブチ抜いたの、高町こいつだったな。

「別名、管理局の白いあ」

「少し頭冷そつか、テーニヤ」

テーニヤの顔が一気に青ざめ、目には涙が浮かんでいる。それに比べ、高町は引きつった笑みになっている。

何かコンプレックスでもあんのかよ・・・

テーニヤは、それはそうと、と言って話題を無理矢理変える。

「いまからどこに行くんですかあ〜？」

「訓練室に見学しに行くつもり。二人の要望でね。テーニヤはどうするの？」

「時間あるしい〜、私も同行していいですかあ〜？」

「うん、全然！」

マジで！？こいつ来るの！？

「ありがとうございますう〜。」

「ちょ、おい！勝手に……………」

（テーニヤはタガー使いだから、近距離戦の参考になるよ？）

「……………」

こいつもテレパシーみたく出来んのかよ・・・
どっちみち近距離戦は大剣を使う俺に大きなハンデとなるだろう。
そしたら、高町が言う様にむしろ好機と見るべきか。

「・・・分かった。」

という訳で、一人増えて訓練室へと向かうことになった。

「ユニゾンデバイスってのも珍しい。」

「そうか？」

テーニヤにジロジロ凝視されたエルフィは顔が赤くなる。オッサンか、こいつ。

「しかし、可愛いねえ。」

「そ、そんなこと・・・ない、です。」

恥ずかしそうに、エルフィが答える。

「ユニゾンデバイスなら、はやてさんと同じタイプですかねえ？」

「？」

俺には分からなかった問いを高町が代わりに返答する。

「ううん。高瀬君は大剣使いだし、魔力変換資質は見た感じ水だしね。」

「そうなんですかあゝ。先陣切るタイプですねえゝ。稀少能力^{レアスキル}は？」

「それはまだ・・・」

「今さつきから、魔力変換資質とか何の話だ？」

「魔力変換資質はあゝ、属性みたいなものですよあゝ。」

「だから水、と。」

「その通りいゝ」

「レアスキルってのはそのマンマか。」

「ですねえゝ。でも、普通は持ち合わせてる訳がないんで、気に留める必要は全くないんですよあゝ。私もなのはさんもありませんねえゝ。」

「フェイトちゃんもないね。はやてちゃんはあることはあるんだけど、危険だからあんまり使わないかな。」

「そんなに危ねえモンなのか？」

「まあ、ね・・・」

何だ、その曖昧な返答は？

（マスター。高町さん、あまりその事は話したくないみたいなので、触れないでおきましょう。）

そうなのか？

エルフィの方を向くと、僅かながらコクリと頷いた。
エルフィが言うなら、止めとくか。

高町が話題を変える。

「高瀬君は思念通話できないの？」

「思念通話？」

（これですよ、マスター。）

「ああ、それね。テレパシーなんかの一種か？」

「んー、間違っではないかな。魔力行使できる人は殆ど出来るし、
すぐにマスターできるよ」

「どうすりゃいいんだ？」

「意識を話したい相手に集中させて、心に語りかける様に話すの。
試しにエルフィちゃんに話しかけてみて。」

「・・・・・・・・・・」

伝わった、か？

「・・・えつと、もう喋っちゃいましたか？」

「・・・ダメじゃん。」

なんだよ、期待して損したぜ。

「あれ・・・おかしいな。」

高町が意外そうな顔をする。どーせ俺は出来損ないだよっ！

「魔法を使ってたら、そのうち出来る様になりますよぉ。妹がそうでしたぁ。」

「ホントなのか？」

「はいい。魔力を使うに連れて慣れてきたらしいですよぉ。」

なら、俺もそのうち出来る様になるのか。

「テーニヤの妹さんって、管理局？」

「ですねえ。なんでも、各地の魔導士人口調査らしいですよ。」

そうこう話していると、訓練室に着いた。

第3話「管理局」(後編)

「はいっ。ココが訓練室。」

「つつーても、鉄壁の扉だな。」

そう、目の前に頑丈そうな扉がずっしりと構えている。

「魔力操作で防壁できないんですか？」

エルフィもそこは疑問に思っただけらしい。

「一応してるんだけど、それだけで防ぎきれなかった時のためにね。」

「たとえば、なのはさ」

「ん？どうしたの、テーニヤ」

「い、いえ。何もありません、高町一等空尉。」

「よろしい。」

(一体どうしたんでしょうね、テーニヤさん？)

さあ……

首を傾げて、分からないとジェスチャーをする。

高町が扉の横に埋め込まれているパネルを操作して、ガシャン、と扉が自動ドアの如く開いた。それと同時に、局員たちが戦闘訓練をしている光景と音が知覚情報として入ってきた。

ガキッ、ガンッ、トガアーン

「うおりゃーっ！」

「ていつ！」

「いゃんッ！」

「はっ！」

・・・違う掛け声が聞こえなかったか？

「なあ、高町。掛け声だけどさ・・・」

「ああ、あれね・・・」

高町が苦笑いの表情になる。

「戦闘員は全員男性なんだけど、これだけ集まると・・・ね？」

「・・・オカマがいてもおかしかあねえ、と。」

「オカマなんて、ザラにいますよぉ。」

そんな言われて、オカマだけの隊員を想像してみたんだが、

「ほらっ、あんた向こうに標的ターゲットがいるわよっ!」

「えゝ、コワイ あんたが撃墜しなさいよっ!」

「なんでよっ! あんたの方があたしより筋肉あるじゃないっ!」

「何言ってるの!? 魔力量はあんたの方が上でしょ? ああもっつ、標的が接近してるじゃないっ!」

「どーすんのよっ!」

「そんなの知らないわよっ! あんたが何とかしなさいよっ!」

「だーかーらー! それはあたしのセリフでしょっ! あんたが」

ズガァーーン

うえっ。は、吐き気が・・・

「あの、マスター？顔色が悪いですけど・・・」

「だ、大丈夫。余計なこと考えてただけだから・・・」

「オカマで編成された組隊とかですかあ？」

「ッ！？何故それを！」

「大体分かりますってえ」。

「でも、普通の隊員より強い面もあるからね。」

「そ、そうなのか！？」

「ですよ。乙女心を傷付けられたオカマは、どんな女よりも執念深いんです」。

「お、乙女心って・・・」

「向こうが空いてるし、行こうか。」

高町に先導され、スペースのある場所へと移動する。

「それじゃ、準備して。」

「なあ、エルフィ。」

「どうしました、マスター？」

「もう少し詠唱を短くできねえか？長過ぎだ、ありゃ。」

「どーしたんですかぁ？」

俺とエルフィの会話を聞いていたテーニヤが尋ねてくる。

「変身するときの詠唱が長えんだよ。」

「うーん、それも慣れですからねえ。なのはさんを見てて下さい。」

そう言われ、俺らは高町の詠唱を聞くことにした。

「いくよ、レイジングハート！」

「Ok, master。」

「セーットアップ！」

「Stand by ready・Set up。」

一瞬で昨晚見た魔導服に変身する。

「短い・・・」

「なのはさんは詠唱無しでもバリアジャケットになれますからねえ」

」。

「バリアジャケット？」

「戦闘服、と言えば聞こえが悪いかもしれませんがね。」

「ああ、あれね。」

「試しに真似したらいいかもしれませんね。」

「してみますか、マスター？」

「そうだな、出来るなら早え方がいいからな。」

「それじゃあ、やりましょう。」

「いくぜ、エルフィ。セーットアップ！」

「……ん？」

「変わって、ませんね……」

「マジかよ……」

ガツクリだ。本日二連敗。

「最初から詠唱するしかなさそうですねえ……」

変身した高町が様子を見にこちらへやって来た。

「バリアジャケット着けた？」

「まだだ……」

「詠唱省略をしてたんですよ。」

「ああ。さすがに最初は難しいかもね。私も詠唱無しで出来たのは魔物に襲われた時だったから。」

そうか。ならそんなに気にすることじゃ

（でも、それが出来たのはレイジングハートもらって2日目だそうですねえ。）

……俺はやっぱり出来損ないなのか？
せつかく立ち直りかけた気分をテーニャの一言で再びドン底まで叩き落とされる。

「ま、マスター。練習したら出来るようになりますって、ね？」

必死に俺を慰めてくれるエルフィ。

「取り敢えず、バリアジャケット着よ?」

「分かった・・・」

はあ、ヤル気ねえ・・・

「我使命を受けし者なり。契約のもとその力を解き放て。風は空に、星は天に。そして不屈の魂はこの胸に。この手に魔法を。エルフィ、セーットアースプ!」

蒼光につつまれ、一瞬でバリアジャケットに変身した。
ちなみに大剣八岐大蛇は背中に納刀してある。

「で、何すんだよ?」

「・・・詠唱、一晩で憶えたの?」

「はあ?んなコトするワケねえじゃん。自然に浮かんでくるんだよ。
お前だつてそうだろ?」

「・・・えっと、うーん・・・・・・・・」

高町が返答しかねているが、どうして詰まるんだよ?

「と、取り敢えず、先に私と戦闘訓練しましょう。」

「お、おう・・・」

テーニヤもいつの間にかバリアジャケットに着替えていた。

動きやすい服装を意識したのか上は緑色系のノースリーブジャケットで肩には黒のガード、下は青のスパッツだ。

そして、武器のタガーはテーニヤの両手の手首から生えて、甲にかけて張り付く様に装備されている。刃の長さは30cmあるだろうか。幅は手の甲よりも少し長めにとつてある。

「あと、私の相棒、ラズバーンですう。」

と、ダガーの根元についている緑のリングが声に合わせて光る。

「Hi・I・m glad to see you」

「は・・・ハイ。」

最初のハイ以外、サッパリ分からん・・・

「距離を取つて。」

高町の指示通り、お互い間合いを取る。

「マスター、頑張つて！」

「お前は戦闘しないのか？」

「それは私が言ったの。」

「高町が？」

「実際に戦う時は一人が多いからね。」

「ふーん・・・」

それじゃ、初めての一人じゃん。いいもん、ひとりでできるもん！俺は八岐大蛇を肩に担ぎ、ティーニヤは腰を落としてタガーを俺に向ける、独特の構えを見せる。

「位置について・・・始めっ！」

先手必勝！

ティーニヤの方へ思いつきり踏み込み、助走をつける。が、ティーニヤは動かない。動かないなら、一発ブチ込んでやるぜ！

「湖水月！」

八岐大蛇が蒼く輝き、ティーニヤへと刃が下ろされる。

「な・・・」

刃がティーニヤの頭を通過する直前にティーニヤの姿が少し小さくなった。

すると八岐大蛇は標的を切らずに、そのまま鉄板の地面へと虚しく空振りする。

「刃筋は悪くないんですけどねえ」。

「てめっ、いつの間に・・・！」

ティーニヤは八岐大蛇の攻撃範囲の僅か先に移動していた。しかも、姿勢を変えずに。

「大振りするから、軌道が分かるんですよ。」

そう、大剣は大振りしないと攻撃が出来ない。タメが長い分、ダメージが多いのが利点だが、テーニヤの指摘通り避けやすい。でも、八岐大蛇の重量は異常な程に軽い。これなら・・・

「回れえーっ！」

ブォン！

一歩踏み込み、地面に降ろした八岐大蛇を半時計回りに回し、無理矢理回転切りの体勢へと持っていく。

「甘いねえ。」

テーニヤは左肘を曲げて腕から先を斜めにし、タガーの側面刃をレール代わりにして八岐大蛇の軌道を変える。

「ガラ空きだよ。」

ドカツ

「ぐあっ!？」

軌道が逸れた八岐大蛇がテーニヤを通り過ぎたところで、横蹴りを食らった。

体勢が崩れて、それでも体は回転しながら地面に倒れる。

左腕を突差に伸ばし、地面に手を付いて倒れるのを回避しようとするも、逆に回転の勢いで手首があらぬ方向へ曲がってしまい、激し

い痛みを感じながら地面と挨拶してしまうハメとなった。

「こんにやる・・・！」

急いで立ち上がる。運がいい事に、利き手を挫かずに済んだ。まだいけるか。

「大剣を片手で扱うなんて無謀ですよ〜？」

ちっ、それぐらいわかってらあ！

改めて、八岐大蛇を構え直す。

「片手で持てる位軽いんですね〜。それでも、無謀なことに変わりはありませんよ〜。」

「・・・？」

「なぜなら、」

テーニヤが初めて攻撃体勢に入る。

俺は八岐大蛇を向かって来るテーニヤに斜めに斬りかかる。

しかし、テーニヤはまたしても横ステップで回避し、俺の左手後ろへ一気に回り込んだ。

「ッ!？」

八岐大蛇を振るう動作中なので、先程の回転斬りに切り換えられず、シールドの展開も間に合わない。

「くっくっ！」

タガーが緑色に一瞬光り、強烈な打撃が俺の体を襲う。

「がっ・・・！」

そのまま体が仰向けに倒れ、地面にぶつかった反動で八岐大蛇を放してしまった。

直後、首元にヒヤリとする感触が奔る。

「つと、ここまでですねえ。」

「Checkmate。」

見上げると、テーニヤがタガーを俺の首筋に立てていた。

「も、もう終わりかよ・・・」

「そりゃあ私は訓練してますんで、簡単に倒してもらっちゃ困りますってえ。」

「You can be stronger. It's too bad to give up。」

「・・・なんだって？」

「『諦めるなよ、強くなれるのにさ』だそーですう。」

いやいや、動きに追いつけないから。諦める以前の問題だし。

「高瀬君、どうだった？」

高町が俺に感想を求める。

「全然だ。掠りもしねえ。」

「テーニヤは強いからね。近距離線なら管理局でもトップクラスの実力じゃないかな。」

「やめてくださいよぉ、お世辞なんてえ。」
「??」

「・・・そんなヤツと戦わせたのかよ。」

「でも、参考になっただでしょ？」

「そりゃそうだが・・・」

初手からボコされるなんて、ザコキャラの気分だ。

「マスター、お疲れ様でした。」

「・・・ああ。」

「そんなに気を落とさないで下さい、ね？」

「そうそう、負けたら負けたで負けた分材なりに頑張ればいいんですよぉ。」

「・・・こいつもム力つく。」

俺の周りには性格が独特な奴らばっか揃うんだが、これはどうして

だ？

なかやんといい、高町達といい、テーニヤといい・・・唯一マトモなのはエルフィぐらいか。

「そうですね、敗者は敗者なりに頑張ればどうにかかりますよ、きつと！」

やっぱこいつも頭のネジが一本外れかかってんだ。そうだ、そうに違いない。

「さて、どうする高瀬君？」

「何が？」

「私としてみる？」

「高町と！？」

本来ならば、確かに高町から指導を受けるハズだったので何とも思っ
てなかったが、テーニヤから強いという話を聞き、昨日の壁抜きを
思い出し、出来る事なら高町との戦闘訓練はしない方向で行きた
い。行きたいんだが・・・

「・・・止めとく。」

「ええっ、なんで？」

「お前の破壊した体育館を思い出したら、ちよつとな・・・」

「大丈夫だよ。今日は非殺傷設定で、手加減もするから」

「きよ、今日はって・・・昨日は殺す気だったのかよ!？」

「未確認物体を対処する時の基本だよ？まずは自分の身を守らないと、逆に死んじゃう可能性があるからね。」

「じゃあ、あの魔力砲に俺が当たってたら・・・」

「お前は既に死んでいるっていうパターンですねえ。」

「え・・・」

「おい、高瀬くん？顔が強張ってるよー？」

「・・・あ、ああ。」

俺はこの時程、生きていることに感謝した時はないと思う。

「なのはさんが余計なコト言うから高瀬さん、軽く放心してますよ
お。」

「ちょっとした冗談だったんだけど・・・」

「どういうことですか、高町さん？」

「^{ターゲット}体育館に標的がいるって認識した時点で殺傷設定は解除してたの。
狙いも誰もいない場所にしてたんだよ。」

「あ、そういうことだったんですか。」

「なんだよ、先に言えって……」

「管制室に頼めば建物内部をスキャンして人も物も分かっちゃうし、でもプロテクトが掛かってたら別だよ。」

「それでも、初っ端から殺傷設定なんて早々無いですよぉ？」

「だって緊急時の召集で、誰でもどれほどの魔力なのかって判明しなかったから、念には念をとてね。」

「俺らが死んだかもしれないってのに……」

高町には聞こえてないらしい。違う、聞こえてないフリをしている。

「へえ」。それじゃあ、私とマスターの魔力はどれ位だったんですか？

「……B位、だったかな。局員採用の最低ランクと同じだよ。」

「ユニゾンデバイスで、その程度はマズイですかね……？」

「そうでもないと思うよ？結構高いランクのハズだから。」

「高瀬さんの年齢ならまだまだ伸びますからねえ。ランク決めには早過ぎますよぉ？」

「なら良かったです。」

第一、全力が出せるステータスではないので頂垂れるには早過ぎる。

突然、高町の前にモニタが現れた。

「電話？フェイトちゃんからだ。」

高町がボタン操作をし、回線を繋ぐ。すると、モニタにフェイトの顔が映し出された。

「フェイトちゃん、どうしたの突然？」

『なのは、直ぐに来てもらえる？ちょっと面倒な事になったから。面倒な事だって？』

「お、おい。何が起きたんだよ！？」

『・・・それは後で話すから。至急来て。』

モニタが消えた。

「っておい！」

「焦ってましたね、フェイトさん・・・」

「あんまり良くないことみたいだね。まずは行こう。」

「分かった。」

「了解です。」

「急ぎの用みたいですなえ〜。そしたら私はこの辺でドロ〜ンします
う〜。」

「うん。お疲れ様、テーニヤ。ごめんね、また今度食事に行こうね。」

「待つてますよあ〜♪」

「あんま言いたかねえけど、その、ありがと・・・な。」

「私からも。マスターのお相手、ありがとうございました。」

「凸凹コンビだねえ〜、お二人さんはあ〜♪次はもう少し長く戦えるようにねえ〜。」

「るせえっ!」

「はいっ!」

テーニヤと別れた俺らは高町の後を付いて行き、フェイトの元へ向かった。

自動ドアが左にスライドし、小部屋へと入る。

「フェイトちゃん!」

「私とリインもおるでえ〜。」

「そうデスう。」

つと、はやての隣に浮いているちっこいのは何だ？初見だ。

「あなたが高瀬さんとエルフィちゃんですね？」

「お、おう・・・」

「その通りです。」

「私のはやてちゃんのユニゾンデバイス、リインフォース^{ツヴァイ}IEEEス
う。よろしくデスよー」

「よ、ヨロシクな。」

「宜しく願います」

「エルフィちゃんと違って、リインはちっちゃいサイズなんよ。」

「そっちの方がエネルギーの燃費が良いんデスっ」

「へ、へえ。」

「それは便利ですね！」

何だ、その、俺とエルフィの対応が象徴的だ。俺には話の内容なんかどーでもいいんだが、やっぱりサイズが気にかかる。ちっせえのに制服着てんだから、局員ってことだよな・・・

「みんな来たね。」

フェイトの表情からは、良くない情報であるのが丸分かりだ。

「で、何が起こったんだ？」

一息入れて、フェイトの口が開いた。

「ダルゴスが今朝突然死亡したの。原因不明の脳内血管破裂で。」

第4話「T・M・Revolution」(前編)

「死んだって……」

「今回の事件に関する唯一の証人が消えたことになる。エルフィちゃんと言った様に、事件には複数犯も考慮しなきゃいけないし、狙いも分かってないからかなり難航しそう……」

「くそっ！どうしてだよ……」

「あの、原因不明って？」

エルフィが続けて尋ねる。

「今、司法解剖と魔力精査して原因を特定している所。それでも、まだ判明していないの。」

「……」

「これは犯人の証拠隠滅っていうパターンも考えないかん訳や。」

「でも、もしかしたら本当に病気でそうなったのかもしれないな」

「っざけんな!!」

「ま、マスター、落ち着いて!」

「落ち着いてなんかいられるかよっ！？そんな病気なんかになる訳ねーだろっ！あんなピンピンしてた野郎がそう簡単に脳溢血で死ぬかよ！？」

「マスター！あくまで一つの可能性ですから！」

「そんな可能性なんかねえっ！目に見えて明らかだろ！？お前だつて狙われてんだぞ！？」

「それはそうですけど・・・」

「じゃあ黙つてて良いのかよっ！？そんなんだったらいつまでたつても解決なんか」

パシンッ

「っ・・・！」

はやてが俺の顔を叩いた。

「・・・それがマスターとしての行動なん？」

「・・・だから何だよ。」

「いくらデバイスと言えども、一介の人格を預かる主人^{マスター}なんよ。その主人が冷静に対処出来んでどないするん？」

「・・・・・・・・」

「フェイトちゃんさえ詳しい死亡理由は知らん。そんな人に当たっておいで、それじゃ煮え切らんからお次は仕えるデバイスに当たるなんて主人失格やで？」

「・・・・・・・・」

「高瀬君、私達の誰も病気が一番の原因なんて考えとらん。むしろ、その可能性は限りなくゼロに近いと思うとる。でも、可能性のひとつとしてフェイトちゃんは挙げたんよ。仕事柄、全部の可能性は考慮せないかん。それが事件解決の唯一の近道。分かって貰えたやるか？」

「・・・・・・・・悪かった、取り乱して。」

「分かったら宜しい♪」

既にいつものはやてに戻っていた。

それに対して、俺が訝し気な顔をしたせいか、はやてが言う。

「ネチネチ人を責めるのは好きやないんよ。反省したら、そこまでこんな重たい空気、私やて嫌やもん。」

割り切った性格だ。こういう性格だから、クラスの男女両方に人気があるのだろう。

「フェイトもエルフィも・・・突然怒鳴って、すまなかった。」

「気にしないで。誰だって黙ってられないだろうし。」

「・・・本当は私がどうにかしないといけないんですけど、ごめんなさい、何も出来なくて。マスターは私の事を考えてくれているのに・・・」

フェイトは笑って許してくれたが、エルフィは逆にしょんぼりしてしまった。

そこで高町が手をパンパンツと叩き、その場をまとめる。

「はい、それじゃ次の問題を片付けるよ。」

『次の問題？』

俺とエルフィは仲良く頭上にクエスチョンマークを浮かべる。

「囑託魔導士の時点でエルフィちゃんの帰宅許可は出てるから、ここからちよつと面倒なんだ。」

「・・・見当つかんが。」

帰宅許可が出た後が面倒つてのも馬鹿げた話だ。家に帰れるつてのに・・・

「……うん？ちょっと待て。家に帰れるんだよな？つまりは俺んちに。それに別段問題は……」

「……あ。」

「気付いた？」

「……ウチの親か。」

「正解♪」

そうだった、母さんが次の要塞になつてんだ。

つい昨日、エルフィを助けた代償に晩飯抜きになりかけた。理由を話したけど、聞く耳を持たない。現実主義な部分があるので、それが厄介だ。しかも俺には女性関係と縁遠いと思つてやがる。それを魔法というオマケ付きで覆さなければいけないから、頭が痛い。

話に行くにも俺一人、なーんてことはまずねえな。そんなんで勝てる訳ねえ。返り討ちにあうのがオチだ。そこにこいつら4人の援護射撃なんだが、

「それでも勝てる気がしねえ……」

生まれてこの方16年間、母親に口喧嘩で勝った回数は片手で指折り数えるくらい。口喧嘩って言つてもそんなに激しくは無く、軽い愚痴を罵り合う程度だ。それでも2〜3日に一回それをする位だから、6歳までを幼少期としてカウントせずに、更に3日に一回と少なく見積もつても、ざっと1217戦3勝1214敗。勝率は四捨五入しても驚きの0.25%。1%も無い時点で無理だ。

「ん、どうしたん？思いつめた様な顔して。」

「あー・・・不可能を可能に出来るモンか悩んでてな。」

残念ながら、俺の辞書には不可能という言葉が記載されている。特に他の単語の使用例に多いな。例えば「現実問題、それ不可能じゃね？」とか、「えゝ、高瀬君が？無理、不可能w」とか、「高瀬由宇？古典：不可？英語：不可」とか、「あ？由宇が彼女？なんや由宇、まだ自分の可能性を信じとったんかいな。ええか、由宇。わい達は出来る子やないんや。スポーツは素人以上に出来ても、全国レベルの奴が他にある。勉強は論外や。お前、この前の復習テスト、古典と英語、赤点やつたんやろ？諦めりイ、由宇。わい達は当たっていった所で碎けるのがオチなんや。不可能や。だからこそ、今のご時世、情報戦が主流になってくる。裏をかくんや。分かるか？まずは情報の集め方やけどなあ・・・」とか。

「そんなに厳しいの、高瀬君の親御さん？」

「いや、ありや厳しいんじゃないやなくて、現実主義者だ。」

「んなん簡単やん」

アッサリと言ってくれるな、こいつ。

「そんなに自信があるなら、言ってもらおうか。」

「現実を見せれば良いんよ。ありのままをね。」

「ありの、まま・・・」

「そ、ありのままや」

何考えてんだ………

「ホントに上手くいくのか、コレ？」

（今は、はやてさんを信じてやりましょう、マスター。）

って言われてもねえ……

（準備整ったかー？）

（大丈夫です。）

（んじゃ、作戦決行や）

という訳で、自宅前で待機していた俺は行動に出る。ちなみに、エルフィは先程返してもらったダイヤもどきの中だ。管理局の技術部が加工してくれたらしく、ペンダントにしてある。

高町、フェイト、はやては各自の持ち場についてるハズだ。

「ただいまー。」

「お帰りー。」

居間から母さんの声が聞こえた。この時間帯なら、家に居る。

「今日は早かったわね。どうしたの？」

げ、早退したんだっけ・・・

「え・・・ほ、ほら、今日の午後は先生が急用で帰っちまったんだよ。」

これは事実だ。

「ふーん、代理の先生は？」

痛い所を突きやがるツ・・・

「そ、それはツ・・・」

（時間の都合で、その日の代理の先生は登校してない、っていうのは？）

な、ナイスフォロー！

「都合が悪くて、代理のセンサーはその日来てなかったんだよ。」

「あら、それなら仕方ないわね。」

一難去った。恩にきるぜ、エルフィ。

「学校に電話してしつかり最後まで指導して貰わないと。」

「いつ・・・!？」

そ、そそそれはマズイ!!

「か、母さん!センセも忙しいかもしんじゃないじゃんツ!？」

「何言つてんの、あんた。事務所があるでしょ?」

「じじ事務だ、ただだって、いい忙しいかもツ!!」

「必ず誰かが電話に出れる体制で事務運営はされてんのよ。第一、忙しいのは受験期でしょ?」

そうですね、返す言葉もございません。

(・・・)

エルフィもお手上げらしい。

母さんが固定電話の受話器に手を掛ける。

悪い、みんな。最初からクライマックスだ・・・

プルルル、プルルル。

「あら、誰かしら？」

た、助かった・・・

「はい、もしもし。はい、高瀬ですけど。ああ、中山くん？」

助かってねえーっ！！

無理矢理受話器を奪い取る。

「ちよつと、突然何？」

「な、なかやんなら、俺が話すから。」

ハハ、と作り笑いを浮かべる。

『お、由宇か？なんで今日早退なんてしたんや？それならそうと、
わいにも言うてくれ。そしたらわいも』

「うん、分かった。じゃあな。」

『ちよ、おい、ゆ』

ガチャン

ひとまず、余計な奴は排除、と。

（マスター、切り出しましょう。）

・・・そうだな。

「・・・母さん、あのさ。その、非現実的な事って信じる？」

「どうしたの、頭おかしくなった？」

「違えッ！テレビとかで奇怪現象とかやってんじゃない！あれを信じるかってんだよー！」

「だって、あれはどうせやらせでしょ？そんなもの信じる訳ないわ。」

「だよなー。元から期待してはなかったけど、やっぱりって感じ。でも、これでいい。ネタ入れは完了した。」

「それじゃ、母さん買い物行くけど、あんたどうする？」

「いや、他にやることあるから。」

「そ。じゃあ留守番ヨロシク。」

「はやてさん、フェイトさん。ターゲット、外出しました。」

「はいはい、りょーかい、りょーかい、ほな、後は任せてな。」

「っと、やるで、シグナム、リイン！」

「ハイですっ！」

「やるって・・・主はやて、何をなさるおつもりで？」

「あ、シグナムは初耳ですね。」

「ああ、説明しとらんかったっけ？それはな
- - - - -
」

「主・・・それは本気で？」

「もう本気の本気や。そこまでせんと、高瀬君のお母さん、信じへんらしいよ？」

「かーなりの現実思想家らしいですよ？」

「そしたら、やるしかありませんね・・・」

「んじゃあ、シグナム、リイン、開始やつ！」

（了解。こっちも実行に移るね。）

「連絡来た、フェイトちゃん？」

「うん、高瀬君のお母さんが今家を出たって。」

「そしたら、私も準備しなくちゃね。」

「頑張つて、なのは。応援してるよ。」

「ありがと、フェイトちゃん。」

「上手くいきますかねえ……」

エルフィがペンダントに入つたまま、俺に語りかけてくる。

約45分前の話。

「……………とまあ、こんな作戦や。」

「……………」

「名付けて、高瀬君のお母さんを革命させる作戦（Takase's Mom's Revolution）、T・M・Revolution作戦や!!」

「いや、何か文法的に間違つてね? つか、革命だけイニシャル取らないのはどーしてだよ?」

「だって覚えやすいやろ？」

そりゃそうだ。勝手に有名アーティスト名をこんなシヨボい作戦名に使ってくれちゃ、ご本人も迷惑だろ。

「細かいことは気にせんと。ほな、有言実行や、迅速に行動、行動！」

「さあな。『結界張って、その中で異常気象起こすから、後は高瀬君、助けにきてや』だと。んなんで、魔法って分かる訳ねえよ。」

「でも、なのはさんが異常気象起こしてる魔法使いの役をするそうですよ？」

「……はい？」

「それで、マスターのお母さんの前に現れ」

「いや、聞いてないから、その設定。」

「え？はやてさんが全部念話で話してましたけど。マスターにも伝えてるからって。」

「あのやろ・・・!!」

まあ、お似合いっちゃあ、お似合いだけどな。

「んで、俺がどーすんだって？」

「マスターのお母さんを助けるんです。」

そこは予定通りか。

「・・・高町は手加減してくれるんだろっな？」

「流石にすと思えますけど・・・」

体育館を破壊した時の威力で海鳴市を荒らしてくれたら、ひとたまりも無い。町が丸々一つ壊滅するだろう。

「様子を見に行きましょう。」

「そうだな。」

という訳で、玄関のドアを開けると、そこは

「・・・・・・・・寒っ!!」

吹雪でした。

「はやてさんの結界が既に張られてますね。」

「だからって、コレじゃ出オチも良いトコだぞ!？」

（あー、高瀬君。出たんかー？）

（はい、丁度今、外に出たばかりです。）

（ほんなら、後は頑張つてなあー♪）

この時ほど、念話が出来ないのを悔やんだことは無い。

「あのやろっ……」

「着込んでから行きますか？」

「でも、バリアジャケット使ったら、防寒にもなるんだろ？」

「ですね。」

「んじゃ、それで行こうぜ。」

つつーことで、また詠唱タイムだが、正直嫌だ。
だから、また出来心で

「エルフィ、セーットアップ……」

「マスター……その」

「いや、それ以上、何も言わなくていい。」

三度目の正直か……

鬱になるな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0582i/>

魔法少女リリカルなのは +secret ambition+

2010年10月8日23時50分発行